

雛の別れ

野村胡堂

—

「こいつは可哀想だ」

銭形平次も思わず顔を反けました。ツイ通りすがりに、本郷五丁目の岡崎屋の娘が——一度は若旦那の許嫁と噂されたお万と、いう美しいのが、怪我で死んだと聞いて顔を出しますと、手代の栄吉がつかまえて、死のように不審があるから、一応見てくれと、いやおう言わさず、平次を現場へ案内したのです。

それは三月の四日、雛祭ひなまつりもいよいよ昨日で済んで、女の子にはこの上もなくうら淋しいが、華はなやかな日でした。桃は少し遅れましたが、桜はチラリホラリと咲き始めて、昔ながらの広い屋敷を構えた大地主——岡崎屋の裏庭からはお茶の水の前景をこめて富士の紫まで匂う美しい日、この情景とはおよそ相應ふさわしくない、陰惨なことが起つたのでした。

「これはひどい」

平次はもういちど唸うなりました。二十一というと、その頃の相場では少し臺とうが立ちましたが、とにもかくにも、美しい娘盛りのお万が、土蔵の中、——ちょうど梯子段の下のあたりで巨大な唐櫃からびつ

の下敷になつて、石に打たれた花のように、見るも無残な最期を遂げていたのです。

「あ、親分」

平次の顔を見ると、必死の力を出して、娘の死骸の上から唐櫃を取除けた父親の半九郎——岡崎屋の支配人——は氣狂い染みた顔を挙げて、平次に訴えるのでした。その絶望的な瞳には、形容しようもない狂暴な復讐心が燃えるようでもあり、運命に虐げられて、反抗することのできない檻の中の猛獸の諦めがあるようでもあります。

「親分さん、あんまりじやありませんか。お万の仇を討つて下さ

い」

手代の栄吉はそつと袖を引きました。

唐櫃は骨董^{こつとう}やガラクタ道具を入れたもので、旧家にこんな物のあることはなんの不思議もありませんが、その唐櫃の中に、骨董品にまじって、巨大な漬物石が二つ——二三十貫もあろうと思われるものが入っていたのは奇怪で、その上二階の梯子段から少し離れて、安全な場所にある筈の二つ重ねの唐櫃が、いつの間にやら手摺^{てすり}の側に寄つて、上のが一つ、欄干^{らんかん}を越して転がり落ちたのは尋常ではありません。

籬の別れ

見ると、唐櫃といつしょに二間あまりの長い綱で連絡した棒が

一本と薄い板が庭に落ちており、その綱は有合せの短かい縄を三本も結び合せたもので、結び目がちよつと見ると男結びに似た機結びだったことなどが、咄嗟の間に平次の注意をひきます。

お万の死骸は全く見るも無残でした。百貫近い唐櫃にひしがれて声も立てずに死んだことでしょう。

「親分さん、これが唯の怪我や過ちでしようか」

手代の栄吉の言うのも全く無理のないことです。

ともかくも、お万の死骸を家の中に移さして、これからひと調べという時、

「親分、大変なことがあつたんですってね。何んだつてあつしを

呼んで下さらなかつたんで

甚だふくれて飛び込んできたのは、ガラツ八の八五郎でした。
「八か、そう言つてやる隙ひまがなかつたのさ。まあ、手を貸してくれ。
いい塩梅あんぱいだ」

「何をやらかしやいいんで?」

「近所の噂を集めてくれ、いつもの通り」

「それだけですか

「後は後だ。まずそれだけでいい」

平次は八五郎を追つ払うようにして、死んだお方にひどく同情を寄せて いる手代の栄吉から調べ始めました。

—

この男はもう三十を越したかもわかりません。典型的なたなものお店者で、物柔かな調子や、蒼白い顔や、物を正視することができない臆病な態度など、岡つ引に取っては、くみし易い方ではありますん。

「先代の旦那様は、安兵衛様と仰しやつて、一と月ほど前に亡くなりました。病気は卒中という見立てでございました。若旦那の安之助様は、二年前から勘当され、いたこ潮来の遠い親類に預けつ放し

で、親旦那様の御葬とむらいにもお呼びになりません」

「世間並の道楽でもしたというのか」

「へエー、まあそんなことでございます——お万さんと一緒にな
るのが嫌だと仰しやつてツイ家を外になさいましたので、番頭さ
んへの義理で勘当なすつたように世間では申しております」

栄吉はこれだけの事を言うのが精いっぱいでした。

「岡崎屋の身上しんじょうは？」

「私にはよく判りませんが、貸地家作、貸金がたいそうな額でま
ずざつと二万両——」

籬の別れ

「大旦那様がたいそうお腹立ちで、若旦那様の勘当を許すと仰
しやらずに亡くなつてしましましたので、やつぱりお嬢様のお琴
さんに御養子をなさることになりますよう」

「一番馬鹿を見たのは、番頭の半九郎だな。娘のお万が岡崎屋の
嫁になり損ねた上、こんなに虐待むごたらしく殺されては」

「へエー」

「お万を怨む者はないのか」

「あるわけはございません、——陽気で話好きで、みんなに好か
れておりました。嫌いだつたのは若旦那だけで」

「若旦那の安之助は、そんなにお万が嫌いだつたのか」

「へエー」

それが嵩こうじて勘当こうとうされることになつたのでしよう。

「口くちを利とく親類しんるいは?」

「旧きゅういお店たなですが、江戸えどには遠縁おんねんの御親類ごしんるいが二三軒にさんけん。あとは木更きさらぎ津つや、潮来いたこにあるだけで」

「支配ばんとう人の半九郎はんくろうは、ただの奉公人ほうこうじんか」

「いえ、遠い親類おんねんだと申すことでござります」

「ところで、この家いえに、田舎いなかで育いくつた者しやくがあると思うが——」

平次の問いは妙な方ほうへ飛びます。

「下しも女めのお文ふみと、飯めし炊くきのお今は田舎いなかで育いくちました。お文ふみは房州ぼうしゅう

で、お今は相模さがみで、そんなものですね』

「男では』

「男は皆んな江戸生れです。支配人も、私も、与七さんも』

「その与七さんというのは?』

「先代が亡くなつた大旦那おとねと懇意こんいだつたそうで、奉公人とも客とも付かず、三年前からあります』

「その男に逢つて見よう』

平次はひどく好奇心を動かした様です。

が、逢つて見て驚きました。暗がりから牛を曳出したような男というのは、この与七のためにできた形容詞けいようしでしょう。一々噛み

しめてから物を言うような、言葉も動きも、恐ろしくテムポの遅い人間で、二こと三言話していると、ジリジリ腹が立つて来るのです。

「お前さんは与七さんだね」

「へエ、——世間では——そう申します」

二十五六の良い若い者が、すべてこの調子で受け答えをするのでした。

「世間でそう言うから、与七見たいな気がするというのかえ」

「へエ」

平次はツイ、ポンポンやりました。ニヤリニヤリと薄笑いしな

がら、恐ろしく粘ねばつた調子で、こんな歯切れの悪いことを言う人間を、平次は見たこともありません。

「けさお前は何をしていたんだ」

「いつもの通り、帳面まくをしておりました。家賃や地代の払わない分を纏まとめて、五日には一と廻りしなきやなりません」

これだけのことを言うのに、ざつと四半刻（三十分）もかかりそうです。この調子で地代家賃の居催促ざいそくをされたら相手はさぞ参るだろうと思うと、ポンポン言いながらも平次はツイ可笑おかしくなります。

「お方は人に殺されたんだぜ。お前さんに下手人の心当りはない

のか」

露骨に直截に言う平次。

「へエ、——殺されましたかな。——あの女ばかりは人に殺され
そうもない女でしたが」

「何故だい」

「ガラガラして、薄つぺらで、気軽で、尻軽で、人間が面白くて、
浮気つぽくて」

「たいそう悪く言うんだね——お前も怨みのある方かい」

「御冗談で、——私はあんなのは虫が好きません——死んだ者を
悪く言つちや済まないが、——尤も、若旦^{もつと}那と来た日にや、顔を

見るのもイヤだと言つていましたよ」

「お前さんとこの家は、どういう引っ掛けになるんだ」

「私の親父と、亡くなつた大旦那は無二の仲でしたよ。——たつたそれだけのことで」

噛みしめながら物を言う癖くせに、この男には恐ろしく遠慮のないところのあるのを見て取ると、平次はもう少し突っ込んで訊く気になつたのです。

「今朝、倉の扉を開けたのは誰だえ」

「栄吉どんの役目です。今朝に限つたことじやありません。毎朝

顔を洗うと、帳場から鍵を持って行つて土蔵の大戸を開け、それ

から中へ入つて、二階の窓を開けるんです

「それから誰も倉へ入つた者はあるまいな」

「そいつは判りません」

与七はキナ臭い顔をするのでした。

「ところで、外にかわつたことはないのか」

「かわつたことというと、この間から変なものが無くなりますよ」

「変なもの？」

「役にも立たないものが無くなるんで」

「例えば？」

「火箸ひばしが無くなつたり、鉄瓶てつびんの蓋ふたが無くなつたり、足袋が片つっぽ

無くなつたり、貝杓子^{びしゃく}が無くなつたり、支配人の煙草入が無くなつたり、私の紙入が無くなつたり

「フーム

「まだたくさんなくなりましたよ。筆、墨、矢立、徳利、お嬢さんの手箱の鍵、用箪笥^{ようだんす}の鍵、お今どんの腰紐、お万さんの簪^{かんざし}、お文どんの櫛、——」

「それは大変なことじやないか

「尤も、たいがい出て来ました。翌日か、遅くて三日目くらいには、誰かが見付けます。簪が火鉢の灰の中に突つ立つてしたり、擂粉木^{すりこぎ}が仏壇の中にあつたり、徳利^{みずがめ}が水甕^{みずがめ}の中に沈んでいたり」

「みんな出て来るのか」

「中には二つ三つ出て来ないものもありますが、大概はつまらないもので、出なくたって大した不自由はしません」

「いつ頃からそんなことが始まつたんだ」

「大旦那が亡くなつて間もなくでしたよ」

「フーム」

「大旦那が亡くなつた後で、支配人の半九郎さんが、有金や証文を調べると仰しやつて、家中から倉の中まで調べました。その後まもなく変な泥棒が始まつたんです」

「誰かの悪戯かな」
いたずら

「悪戯にしては念が入り過ぎます。——尤もさいしょは単かと思
いましたが、単は鉄瓶の蓋を抽斗ひきだしの中へなんか入れません」

「フーム、面白いな」

「ちつとも面白くはありませんよ」

この悪戯者には、与七も、ひどく腹を立てている様子です。
「で、その中でとうとう出なかつたのは何と何だ」

平次の注意は細かく動きます。

「お文さんの櫛くしと、用簞笥の小抽斗の鍵が一つと、お今さんの足
袋が片つぽと、——尤もこれはお文さんから新しいのを貰つたよ
うですから諦めが付くが、私の紙入は出て来ません」

「いくら入っていたんだ」

「大したことじやございませんが、それでも小粒で一二両ばかり」と七が怨み骨髓こうずいに徹てつするのはそのためだつたのです。

三

平次はもういちど栄吉に逢つて見ました。これは与七をあまりよくは思つていな様子ですが、それでも与七の言つたことは大体承認し、倉の戸を開けに行つたのも、二階の窓を開けたのも自分だが、朝は倉の中に何んの変りもなかつたと言い、その後では

誰が入ったか知らないと言い張ります。

暮から小さい物の盗まれるのは、栄吉も苦々しく思っているらしく、これは誰の仕業しわざにしろ、序ついでに平次に探し出して貰うって、うんと懲こらして頂きたいという意見です。

その時、

「親分、みんな判りました」

飛んで来たのはガラツ八の八五郎でした。

「何が判つたんだ」

平次は眼顔で誘つて、倉の蔭の方に歩き出しながら、ガラツ八の集めた材料を訊きました。

「変な家ですぜ、この家は」

「変な家というと？」

「第一、先代の主人安兵衛は、卒中で死んだことになり、寺方で無事に葬式を受けたが、どうも尋常の死にようじやないという者がありますよ」

「誰だえ、そんなことを言うのは？」

「横町の小唄の師匠で」

「横町の小唄の師匠は、何んだつてそんなことを知っているんだ」

「与七が毎晩のように絞め殺されそうな声を出しに行くそうで

すよ」

「へエ――、あの男がね。人は見かけによらないというが、こいつはよらなさ過ぎるぜ」

暗がりから曳出された牛のような、生活のテンポの恐ろしく遅い男が、黄なる声を出して小唄を唄つたら、一体どんなことになるだろうと思うと、平次もツイ吹出しそうになります。

「支配人^{ばんとう}の半九郎は、先代の主人が死ぬとすつかり羽を伸ばして、今じや店中を切り廻しているが、親類中には半九郎の仕打が気に入らないものもあるから、いづれ一と騒ぎ始まるだろうということですよ」

「フーム」

「現に、この十日には親類が顔を寄せて岡崎屋の跡取りを決めることになつてゐるそうで——」

「跡取りは勘当されて潮来^{いたこ}にいる伴の安之助でなきや、娘のお琴^{いのち}だろう」

「先代の主人は、生きているうちに、安之助の勘当を許す気があつたと言いますよ。卒中で不意に死んで、それを運び兼ねたが、
遺言^{ゆいごん}をするとか、遺言状を書く力があつたらきつと若旦那^{ひいき}の勘当を許したに違ひないと——」

「そいつは誰の言葉だ」

「近所の衆は若旦那^{ひいき}頃^頃で、みんなそう言いますよ。許嫁のお万

をきらつて、どうしても祝言しないばかりでなく、ツイ家を外にすることが多くなつたから、亡くなつた主人も支配人の半九郎（お万の父）への義理で、若旦那を勘当したに違いない。あのお喋舌で浮氣つぼくて容貌自慢で、若旦那とはまるつきり反の合わないお万と一緒にされるが嫌で、ツイ自棄なことがあつたかも知れないが、それくらいのことで勘当されちゃ若旦那の方が可哀想だ——とそれは御近所衆の噂で——

「なくなつた主人は、支配人の半九郎に、それほど義理があつたのかい」

「主人の弱い尻を掴んでいるのだろうとか、主人の命の恩人だと

か言いますが、真当のことは解りませんよ』
ほんとう

八五郎の持つて来た材料たねはそれだけ。しかし思いの外役に立ち
そうな種たねだったことは、平次の会心の笑みにも見えるのでした。

四

平次は検屍に立会つた上、一と通り家の中を見せて貰いました。

本郷きつての大地主で、幾百軒とも知れぬ家作持と言われるにしては、思いの外質素な生活ですが、何うしたことか店も奥も滅茶
滅茶の荒しようで、壁が落ちたり、戸棚が引っくり返されたり、

何にか大風の吹いた跡のような浅ましさを感じさせられるのです。

「何を探したんだ。——先代の隠した宝でも見付からなかつたのかい」

平次は誰へともなく言いました。主人が死んで何千、何万という身上の隠し場所が判らなくて、天井も床も剥いだ浅ましい家を、平次は稼業柄幾度も見ているのです。

「飛んでもない。——先代大旦那の亡くなつたのは急でございまびたしたが、支配人の私が帳面も金も預つておりましたので、鑑一文

どこで聴いていたか、支配人の半九郎は平次の不審に応えるようになんて顔を出しました。娘のお方が非業に死んで、その打撃の重大さに押しのめされながら、それでも大家の支配人としての責任に目覚めて、辛くも事務的な心持に立還たちかえつたと言つた世にも痛々しい姿です。

「支配人さん、飛んだことだつたね。娘さんの敵はきっと討つてやるが、——私の訊くことに、何事も隠さずに話して貰いたいが、どうだらう」

「それはもう。親分さん、どんなことでも」

半九郎は、蒼い顔を挙げました。五十前後の柔和にゅうわな男です。

「第一に訊きたいのは、亡くなつた主人とお前さんの関係だ」

「へエ——」

「遠縁のつながりがあるとは聞いたが、その他に何にか深いわけがあると思うがどうだろう」

「ひどい強請^{ゆすり}に逢つてお困りのところを、少しばかりお助けしたことがありますが、外に何んにもございません。唯よく判つた御主人でございました」

「お前さんがここへ来てから何年になるんだ」

「三年でございます」

「もとは？」

「柳橋の船宿におりました」

「その前は」

「いろいろのことをおいたしました」

平次はチラリと八五郎の方を振り向くと、心得た八五郎は、スルリと外へ抜け出してしまいました。半九郎の身許前身を、得意の順風耳で聞き出して来るつもりでしょう。

「ところで、隠した宝を探したんでなきやア、何んだつてこんなに家を荒らしたんだ」

「そのことでございます、親分さん」

半九郎の言うのは尤も至極でした。それは先代の安兵衛が一度

は自分たち父娘への義理で若旦那の安之助を勘当したが、もともと憎くて勘当した伴ではなく、いずれ許す氣で時節を待つていううち、その機会^{きかい}はなくて、不意に死んだに違いない。

「——卒中で死んで遺言はありますんが、用心の良い御主人のことですから、遺言状くらいは書いて、どこかに隠して置いたかもわかりません。若旦那様を許すと書いた遺言状さえあれば、五日後に迫つた親類会議も無事に済んで、若旦那を潮来^{いたこ}から呼戻されます。——私が家中を探したのは、遺言状を見付けたかったためでございます」

「岡崎屋の身上は、土地も家作も貸金も、世間で考えた倍もある上、現金だけでも三千両はございます。支配人の私がそんなものを探すわけがあるでしようか」

半九郎は昂然こうぜんとして頭を擧げるのです。

「なるほどそう聽けば立派なことだ。が、遺言状は？」

「困つたことに、ありませんよ。やつぱり若旦那は運がなかつたんですね。たつた一言許すと書いた遺言状がなければ、御親類方の手前、若旦那を跡取りに立てることもなりません」

娘のお琴は、病身らしい弱そうな体と、それにもまして弱い心の持主でした。十七というにしては智慧も遅く、何を訊いても埒があかず、ただ今朝は自分で雛壇ひなだんを置んで雛の道具を土蔵へ運ぶ筈はずだったが、氣分が悪かつたので止してしまって、下女のお文に頼んだところ、お方が手伝ってくれて飛とんだことになつたということを、おろおろした調子で話すだけです。

「ところでお嬢さん、若旦那いたこが潮来いたこから帰らなきや、岡崎屋の血続の者というとお前さんたつた一人だ。——この家に住んで淋しいようなことはありませんか」

薄暗い家の中の空氣と、ひと癖あり氣な奉公人たちの中にたつた一人取残されたようなお琴の存在は、他から見ても何んとなく淋しくたよりないものだつたのです。

「淋しいと思つても仕方がありますん。それに、出代りで、今日はお文が帰ることになつています。あんなに私へよくしてくれたのに——」

お琴は本当に淋しそうでした。が、平次も慰めようはあります

ん。

飯炊きのお今は四十がらみの相模女さがみで、これは何んの技巧も上

手もない女。

「けさ栄吉が土蔵の戸を開けてから、誰か入つたものはなかつたのか」

平次の問い合わせに對して、

「あつたかも知れないが、ここからは見えませんよ」

「お前は機はたを織つたことがあるかい」

「ありますよ。田舎で育つたものは、一と通り嫁入支度に稽古します。私は木綿機しか知らないが、お文さんは絹機も上手に織つたそうですよ」

お今の答えから、唐櫃からびつを落した仕掛けの綱の結び目のこと、平次は考えていたのです。

それからまた家中の者を訊き廻りましたが、朝の一と刻は忙しいので、誰が倉へ入つたか見定めた者もなく、平次の骨折も何んの収穫もありません。多分唐櫃は前々から移して置いて、今朝ちよつとばかり仕掛けをして落したのでしょう。

最後に逢つたのは下女のお文、十九というにしては柄^{がら}も大きく、色の浅黒い、聰明そうな娘で、目鼻立もキリリとして、美しいという程ではなくとも、何んとなく人に明るさと頼母^{たのも}しさを感じさせます。

「お前は今日帰るそうじやないか」

「ハ、ハイ」

「奉公人の出代りは今日だろうが、この騒ぎの中から出られちゃ困るだろう。一応片付くまで帰るのを延ばしちゃどうだ」

「でも、あの、支配人さんが」

「支配人の半九郎が帰れというのか」

「」

「ところで、今朝雛壇の片付けを手伝つたのは、お前のでき心か、それとも誰かに頼まれたのか」

「お雛様の始末だけは、いつでもお嬢様がなさいます。でも今日はひどくお気分が悪そうでしたから、私が手伝つて上げると、お万さんも来て、一緒に片付けてくれました」

「倉へ行つたのは、お前が先だつたというじやないか」

「え、——私のは箱が大きくて入れなかつたので、倉の入口でお万さんが先になりました」

その時のこと思い出したか、お文はさすがに顫ふるえている様子です。

「お前はこの家に何年奉公しているんだ」

「今日でちょうど三年になります」

「家へ帰りたいのか」

「いえ、——でも」

平次を見上げた賢こい眼には、涙を含んでおります。粗末な木

綿物を着て、白粉つ氣もないこの平凡な娘に、不思議に清らかな

魅力を見出して、平次はいろいろのことを考えさせられました。

その日の調べは、それで切り上げる外はありません。最後に念のために、もういちど土蔵の中を見ましたが、二階の唐櫃の落ちたのはやはり悪者の巧みに企たくらんだ仕掛けで、大きな籬の道具を入れた箱を持つて、足元を見ずに登つたとすると、かならず第一段目で仕掛けの板を踏み、綱に加わった力が上に伝わって、危うく手摺てすりから乗出させた唐櫃が、百貫近い重さで、ちょうど下にいる人間の頭の上に落ちるようになっていたのです。

お今に訊くと、漬物石はよく洗つて、階下の漬物倉に置いたも

の。一つの目方が十貫近く、これを樂々と持ち運べるのは家中に
幾人もありません。

帰る時支配人の半九郎に、下女のお文を宿へ帰さないように頼
みましたが、どうしたことが半九郎はあまり好い返事をしてくれ
ないばかりでなく、

「あの娘は悪い癖がありますから」

と露骨に嫌な顔を見せるのでした。

その晩、平次に代つて、ガラツ八の八五郎が岡崎屋を見張りました。

支配人半九郎、掛り人与七、手代栄吉、下女お文、お今——などの身許調べは下つ引五六人を狩り出して、手いっぱいに勧かせたことは言うまでもありません。

「八、若い女二人に気を付けろ」

平次が注意したのはたつたそれだけ。八五郎はその意味が判らないながらも、下女のお文をお琴の部屋にいっしょに寝かした上、自分はその隣りの部屋に頑張つて、とうとう夜を明かしてしまいました。ガラツ八の巨蛇のいびきごえが、完全に若い女二人を護

り通したのでしょう。

翌る朝、平次がやつて行くと、八五郎はおよそ酸っぱい顔をして、何やら考えております。

「どうした八」

「あ、親分、お早う。——どうどう^お遂い出されてしましたよ」

「何が出されたんだ

「あの娘が約束通り暇を出されて、ツイ先刻宿元へ下つた^{ばか}許りで

「下女のお文か」

籬の別れ

「帰る時、そつと私に渡して行つたものがあるんで」

「何んだい、それは？」

「尤も、物を言う隙も、手紙を書く折もなかつたが、これじやまるで見当が付かねエ。ね、親分」

「娘が何を渡したんだ」

「これですよ、菱餅ひしもちが三つ」

「そいつは飛んだ判じ物だね。鮑あわびツ貝か何かなら恋と判ずるが

「冗談でしよう」

「菱餅じや古歌にもないとよ」

「ほんとうに何とか判じて下さいな、親分」

「どれ、見せな、——おや、おや、草色の餅と白い餅の間に、鍵の型が附いているじやないか」

「へエ——」

「鍵の型があつて鍵が無い——と」

雛の別れ



©2017 萩 柚月

平次の頭脳は忙しく働きました。昨日掛り人の与七から聴いた話の中に、この間から店中でいろいろの物が無くなり、大概は変なところから現れて来たが、用簞笥の小抽斗こひきだしの鍵と、お文の櫛と、与七の紙入だけは出なかつたということが、この菱餅の中に隠された鍵と暗合するのではなかつたでしょうか。

小粒で二両入つていたという与七の紙入は、往来か錢湯か、横町の師匠のところで紛失ななくし、お今の足袋は犬でも咥くわえて行つたとすると、この家で無くなつた品で本当に発見されないのは、用簞笥の鍵と、お文の櫛と、たつた二つだけになります。

お文の櫛は、お文自身が隠したものとして、もしその悪戯者が

お文だつたら、用簞笥の鍵の紛失の意味を隠すために、いろいろの愚にもつかぬ品を隠して、家中の注意を外らしたとも見られないことはありません。

こう考えると、急に暇を出されたお文が、鍵のもつ重大な意味と、昨日までその鍵を隠しておいた場所を暗示するために、鍵の型の附いた菱餅を、ガラツ八に渡して行つたのではないでしようか。

「八、お前はその菱餅をどう思う」

「あの娘は親切者ですよ。せつかく貰つた菱餅を食う隙がなかつたんで、あっしにくれて行つたんでしょう」

「馬鹿だなア。——その菱餅に大事な鍵が隠してあつたんだ。——

——菱餅に隠した鍵は、節句過ぎには見付けられる。——その時、

お前ならその鍵をどこへ隠す?」

「懐中か、袂たもとの中へ入れますよ」

「支配人に身体を調べられるかも知れない——今までそんなことが時々あつたとしたら」

「さア」

「三日の夜か、四日の朝だ。籬を片付けながらの思案だから、——

——俺なら籬簾笥ひなだんすへ入れる

「なるほどね」

「来い八」

二人はそつと倉の中に入りました。昨日仕舞い込んだ雛の道具の中から、高蒔絵たかまきえの可愛らしい雛箪笥を見付けて、念のために振つて見ると、中でカラカラと鍵が鳴つていて、念のために「八、この通りだ。——俺はこの鍵で少し細工さいくをして見る。お前はこの倉の中で大きな声を出して人を集めてくれ。お万殺しの証拠が見付かったとか、何んとか言やあいい。家中の者が来たら、その唐櫃からびつを落した仕掛けの綱を見せて、馬鹿なことでも喋舌しゃべつていてくれ」

「馬鹿なことですか、親分」

八五郎は少し不服そうでした。

七

その日、平次は籠箪笥の中から見付けた鍵を、何んにも言わず
に手代の栄吉に渡して帰りました。

それから五日目岡崎屋の親類会議が開かれ、先代安兵衛の遺言
状も何んにもなかつたために、勘当された若旦那の安之助は、や
はり潮來^{いたこ}から帰れないことになり、岡崎屋の家督は娘のお琴に婿
を取つて継がることにし、半九郎はそのまま支配人として留ま

ることに決定しかけた時でした。

「しばらく待つておくんなさい」

錢形平次は、八五郎と下つ引二人をつれてようやくその席へ驅け付けたのです。

「錢形の親分、——この親類の話合いに、何にか不足でもあると
言われるのか」

支配人の半九郎は屹きつとなりました。

「大不服だ」

「何?」

「用簾笥の奥の隠し抽斗にあつた、先代の遺言状——伴安之助の

勘当を許し、岡崎屋の家督、相違なく相嗣ぐべきもの也——とい
う直筆に判を捺したのを破つて捨てたのは誰だ』

「えツ」

「俺はそれを察して、鍵を手代の栄吉に渡し、栄吉から支配人に
渡すように仕向けた。尤も眞物ほんものの遺言状を抜いて、用箋笥には写
しの偽物にせものを入れておいたとは気が付くまい。お前が破つて捨てた
のはその偽物の遺言状だつたんだ」

「」

「眞物はこの通り、ここにあるぞ。御親類方、この半九郎に騙さ
れて、罪のない若旦那の安之助さんを日蔭者にしちやいけません」

「」

「まだあるぞ、半九郎。——たつた一人残つた岡崎屋の血統——
お嬢さんのお琴さんを殺すつもりで土蔵に仕掛けた唐櫃からびつ、お琴さん
が氣分が悪くて、お前の娘のお万が行つたばかりに、あの虐むごた
らしい死にようをしたのを忘れはしまい」

「嘘だ、嘘だッ——何を証拠に」

「死んだ娘の死骸の前で、もう一度それを言つて見ろ。可哀想に
お万は、親の恶心のために、罪もなくて死んでしまつたのだぞ」

「嘘だッ」

半九郎は立上がつて、自分の喉のどを搔きむしりながら皺枯声しづがれごえで叫

ぶのです。狂暴な眼玉が、今にも脱出しそうにギラギラと光ります。

「お嬢さんを殺し、若旦那を日蔭者にしてしまえば、岡崎屋の身上は、お前たち父娘のものになると思つたろうが、そうは行かないぞ。見ろ、この綱の結び目、巧みに企んで機結びにしたのは、万一露見したとき、下女のお文にお嬢さん殺しの罪を背負わせる気だつたが、お文にはあの十貫目以上もある漬物石は運べない」

「——」

「お前は柳橋へ来る前、上州の機屋に長いあいだ奉公していたことを、下つ引が五日がかりで調べ上げて来ているぞ」

「嘘だ」

「嘘か、嘘でないか、お前の娘お万を殺したこの仕掛けの綱に訊けッ」

平次の叱咤の前に、一度は崩折れた半九郎は、目の前に投げ出された綱を見ると、何を感じたかガバと飛び上りました。

「お万、——勘弁しろ、——お万」

バタバタと庭に飛び降りざま、生垣いけばきを越し、往来を突っ切つて、お茶の水の崖がけの上から、数十尺下の水へ——。それは実に一瞬のできごとで、平次もガラツ八も、留めようもない凄まじい破局だったのです。

×

×

それから一と月余り経ちました。

「八、嫌な捕物だつたな。——でも、岡崎屋の若旦那が潮来から帰つて来て、房州からお文を呼寄せ、嫁にする気になつたのは嬉しいことだよ。亡くなつた主人の遺言状を見付けて、それを支配人に気取られないようにいろんな物を隠して用簞笥の鍵を守り通したのは、ちよつと細工過ぎたが、俺は近頃あんな良い娘を見たことはないよ」

平次は岡崎屋の後の始末を噂に聴いて、つくづく八五郎にこう言つのでした。

「八の嫁にも、あんな娘を欲しいなア。どうだお静、お前の方に
心当りはないか」

お勝手で働いている、まだ若くも美しくもある女房に、こう声

なご

を掛ける時は、平次の心持が一番和やかで暇な時だったのです。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままでしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵——萩　柚月

雛の別れ

初出——「オール讀物」昭和十七年四月号　文藝春秋社

雛の別れ

底本——「錢形平次捕物全集」第七卷

河出書房

昭和三十一年八

月五日初版

編集・発行 錢形俱楽部



錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>